

待降節第二主日

2011.12.4

マルコ 1・1-8

今日待降節第二主日の福音は、マルコ福音書の冒頭のことばから始まっています。このことにはどのような意味があるのでしょうか。私たちを取り巻く日々の暮らしは今年も12月を迎え、気分的にもあわただしさを増しています。そんな生活の中にある私たち、今日の福音は、もう一度始めに戻って、私たちが信仰によって受け入れた、神の子イエス・キリストの福音をじっくりと味わうように呼びかけているかのようです。

「イエス・キリストの福音の初め」というマルコ福音書の冒頭の一節は、日々の暮らしに追われている私たちに強烈な一撃をみまう力強さに満ちています。

お前たちは何を信じて生きているのか。何を信じてこの一年の暮らしを生きてきたのか。マルコ福音書の冒頭の一節を、待降節の福音として聴く時、そのように問われているように感じます。私たちの信仰は、神の子イエス・キリストによってもたらされた福音を信じ、受け入れることから始まったはずで

す。「神の子イエス・キリストの初め」というマルコ福音書の出だしのことばは、私たちの信仰の出発点に立ち戻るようにと、呼びかけているようにも思えます。毎年クリスマスを祝うのは、この世の生活を生きる私たちの中に来てくださった神の子イエス・キリストに、私たちの心に向け直すためです。そのためにも、私たちは初めに戻らなければならないのです。

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という預言者のことばは、待降節のこの時期、特別な響きをもって、私たちの心に迫ってきます。主の道は、私たちが信じた神の子イエス・キリストを私たちの中に迎えるための道です。そしてその道は、「わたしはいつもあなたがたとともにいる」と言ってくださる、神の子イエス・キリストに従って歩み出すべき主の道です。日々の煩雑な生活の中に身を置きながらも、待降節のこの時期、神の子イエス・キリストを信じた者としての心の道筋だけは、まっすぐに整え直したいと思います。

神の子イエス・キリストが、私たちのうちにまっすぐに整えてくださったはずの道筋が、私たちの中で迷路のようになってしまい、その道筋を見失ってしまうとすれば、それが私たちの罪なのです。そのような生き方によって、私たちは私たちが信じた神の子イエス・キリストが、私たちのうちに開いてくださった道からそれて、再びあらぬ方向にさまよい出てしまいます。そのような罪を悔い改めるとは、神の子イエス・キリストが私たちのうちに開いてくださったまっすぐな信仰の道に立ち戻るということです。洗礼者ヨハネの姿を通

して、今日の福音が私たちに訴えているのは、そのような悔い改めです。

神などいない。神がいるならどうしてこのようなことが起こるのか。神に祈っていても、何も始まらないではないか。このような声が津波のように私たちの心を襲う時勢の中であって、私たちが復旧すべきは、神の子イエス・キリストがその福音によって私たちのうちに開いてくださった、それでも神を信じるまっすぐな信仰の道です。そのためにも、私たちはイエス・キリストの福音の初めに戻って、神の子イエス・キリストが私たちにもたらしてくださった福音とはどのようなものだったのかを学び直さなければなりません。

神などいない。神がいるとしても、神はこの世に生きる私たちの中で、この世を生きる私たちのために何もしてはくれない。そのような声の満ち満ちている私たちの世界の中に、神はその御子イエス・キリストを遣わしてくださった。これが、私たちが受け入れた神の子イエス・キリストの福音ではなかったでしょうか。神がいるならどうしてこのようなことが起こるのかという神への抗議の声に答えて、神はその御子をこの世界に遣わしてくださったのです。神の子イエス・キリストは、この世の私たちの生活の中に来られて、これ以上に神のみ前で無垢ではありえない生涯を生き抜かれ、十字架の上に犠牲となって死んで行かれたのです。これが、御子を私たちの世界に遣わされることによって、神が私たちに与えてくださった応えです。何故罪もない多くの人々がこのような悲劇に巻き込まれて犠牲とならねばならないのかという、今の世に生きる私たちが神に向ける抗議に対する神の応えです。

罪もない多くの人々の痛ましい死を目の前にして、私たちは自分たちが生きるいのちの尊さを、何ものによっても覆い隠されてはならない、いのちの尊さを悟ったはずですが、けれども、あの時、私たちの中に打建てられた十字架から、私たちの心にまっすぐに届いていた主の道は、一年も経たないうちにどうなってしまうのでしょうか。十字架がなかったかのように生きるということが罪なのです。十字架の悲惨な犠牲が、私たちに啓示した何事にも換えがたい一人ひとりの人のいのちの尊さが、テレビを通して繰り返されるキャッチフレーズとなって、日々の生活を生きる私たちの上を素通りして行ってしまうとするなら、私たちの日々は十字架とは無関係になってしまいます。

2011年の今年、私たちが無数の人々の犠牲によって、あらためて確認させられた、いのちの尊さと絆の大切さは、私たちが神の子イエス・キリストの福音の初めに連れ戻します。私たちが信じた神の子イエス・キリストは、神などいないとうそぶく、この世の傲慢な支配の力の下敷きにされて苦しむ被害者たちのいのちの大切さを啓示しています。そのために、神の子イエス・キリストは、この世の支配者たちの不当なさば気を受けて十字架の上に死んでくださったの

です。その神の子イエス・キリストを、私たちのこの世界に遣わして下さった父なる神は、それだけの犠牲を払って、この世界に対するご自分の愛の絆は決して断たれていないことを私たちに啓示して下さったのです。これが、私たちが信じ、受け入れた神の子イエス・キリストによって私たちにもたらされた福音です。

洗礼者ヨハネは、彼の後から来られる神の子イエス・キリストの道を整えるために悔い改めの洗礼を授けました。私の後から来られるその方は、聖霊によってあなたがたに洗礼を授けくださると洗礼者ヨハネは人々に語ったのでした。

私たちが受けた洗礼は、ヨハネが告げた聖霊による洗礼であったはずですが。けれども、私たちが神の子イエス・キリストが私たちのうちに開いて下さった主の道を見失う時、私たちが受けた洗礼は、私たちにとって、単なる儀式としての水の洗礼に戻ってしまいかねません。

待降節のこの時期、もう一度、神の子イエス・キリストの福音の初めに戻って、洗礼を受けることによって、主イエス・キリストとともに歩み始めた、私たちの信仰の道を見つめ直したいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高